

第二章 滿洲事變以前の對ソ作戰計畫

ソ連建國当初その極東政策は主義上甚しく消極的であつた。一九一八年日本軍は米軍と共に西伯利亞出兵を行い一九二二年に至る間東部西伯利亞、北滿に駐屯して共產勢力の東漸に對する防壁を形成した關係もあり爾後稍く長期に亘りソ連が極東諸國に對して大なる脅威を與へることがなかつた。しかし日本はスラブ民族の東方經略の史実に鑑み避けることの出来なない想定敵國としてソ連を見守つて居り殊に日本陸軍はソ連が將來恐るべきものたるべきを判断し軍備縮少に關しては常に慎重なる考慮を以て作戰計畫に於ては陸軍の主力を滿洲に推進しソ連と決戦を行うの必要を豫期していた。其の對手となるものは単に極東に在るソ連のみではなく歐羅から鉄道により極東に輸送せらるゝソ連を主とするものであつた。

当時參謀本部が立案していた對ソ作戰計畫は集中計畫が主体であり、この頃に於ける陸軍兵力の全般配置、動員速度、日本々國と大陸との

間の交通運輸の能力等を勘案し速に日本軍主力を南滿に進出せしむる方策であつた。その要領は開戦と共に關東軍隷下部隊（一箇師団と一獨立守備隊）と内地、朝鮮より急派する兵力約五箇師団とを以て南滿鐵道（長春—大連間）の北端に近く進出せしめ其の掩護の下に主力を奉天及其の北方地区に集中するにあつた。所要の兵力を集中した主として（状況により集中地を更に北方に躍進することも考慮された）は西伯利亞方面より滿洲に侵入するソ軍を求めて之を撃破するを方針とした。しかし參謀本部は当時具體的の會戰計畫を樹立し得るだけの諸要素を把握していなかつた。

一九二四年には四兆鐵道既に開通し洮昂鐵道の開通も近く予定せられたので(6)ソ軍極東軍備の状態等とも關連し才一期作戰目標を齊々哈爾平地と予定することゝなつた。

この時期の作戰計畫は主たる作戰線を京濱線及洮昂線の二方面に指向するものであり左の如き構想を基準とするものであつた。

即ち關東軍掩護の下に長春及洮南乃至洮安方面に集中を開始し長春方面に於ては適時哈爾濱方向に向い攻勢を執り東支鉄道を分断したる後齊々哈爾濱方面に前進せしめ主力は洮兒河北方地域に於ける集中の進展に伴い東支鉄道によつて東進するソ軍主力に對し嫩江及興安嶺の間に於て北方に向い攻勢を執つて決戦を指導し爾後興安嶺を越えてザバイカル方面に向い進撃を行ひ主旨のものであつた。(7)

当時日本陸軍の戦時兵力は四〇箇師団ありこの主力は朝鮮及關東州を經て集中地に輸送せらるゝことゝなつていた。

(註六) 四洮鉄道は一九二三年、洮昂鉄道は一九二六年夫々開通し洮索鉄道は一九三一年王爺廟まで建設せられた。

(註七) 当時於ては予想し得る敵軍の行動その他会戦計畫を樹立する為に必要な資料が不備であり兵要地理の調査は殊に不十分であつた。地図の如きも南滿地方及主要交通線の附近等以外には作戦用として役に立つものは少い状況であつた。

一九二四年の作戰計畫の変更は動員及集中輸送に關する計畫
 を具体化すると共に兵隊地理の調査を進め又軍隊訓練の基本
 的感據を求むる上に重要なる意義を持つてゐた。

(註八)

陸軍兵備としては一九〇五年一七箇師団、一九〇七年一九箇
 師団、一九一六年二〇箇師団、一九一九年二一箇師団の平時
 兵力を有し一九二二年以後戦時兵力は四〇箇師団であつた。
 後一九二五年に至り平時兵力を一七箇師団に、戦時兵力を三
 〇箇師団(年度により三一箇又は三二箇師団のこともあつた)
 に減少し他に計畫上臨時編成師団若干(年度により二乃至三
 箇の間を上下した)を準備した。